



緊急特集○「政治危機」「経済危機」の時代

鄧小平・李鵬の誤り

いよいよ社会主義解体の「歴史的ドラマ」が始まった

中嶋嶺雄
(東京外国語大学教授)

建国四十周年にして、革命国家・中華人民共和国は解体の危機を宿していることが明白になった。北京の民主化要求の学生デモは中国全土、さらには世界各地の中国人留学生のあいだにも波及し、北京ではさる五月二十日午前十時の戒厳令施行とともに、緊迫した状況が続いてき

た。
今回の北京の情勢は、人民主権を掲げた革命国家がその内部的な腐蝕のゆえに、「人民の波」によって打倒されようとする、中国のもうひとつの革命の始まりだともいえる。
しかも、世界中が注目していた世紀のサミットともいえる、ゴルバチョフ訪中による中ソ首脳会談が行われたその舞台

が「人民の波」に占拠されようとは、中ソ双方の首脳も予想だにしない深刻な事態である。今後の中国の行方のみならず、中ソ両大国を中心とする社会主義の将来に計りしれない歴史的衝撃を与えるものといわざるをえない。
ではなぜ、このような事態に至ったのであろうか。また、そこにはどのような歴史的意味があるのだろうか。

胡耀邦の死がもたらしたもの

今回の学生デモは、さる四月十五日の胡耀邦前総書記の死を契機として、まさに澎湃と起ったものである。しかし、「改革」と「開放」を掲げた中国の現状をみると、社会の全域に不満と不信が高まっており、どこに火をつけても燃えあがらんとする背景をもっていたことを指摘しておくかなくてはならない。

すなわち、経済改革および対外開放政策の行きすぎは、中国全土にスーパードンフレといわれるような物価騰貴を招き、また経済活性化の反面で、中国全土がヤミ市経済化するような混乱をもたらしていた。そうしたなかで、一部幹部の特権、すなわち「官倒」現象(政府と企業が癒着した汚職、官僚ブローカーの横行)にみられる腐敗で、改革と開放の受益者層はますます富む一方、利益に与れない層は置き去りにされ、貧富の差は拡大の一途をたどっていった。

こうしたなかで中国全土に広がる拝金主義の風潮に、学生や知識人などの苦悶は極限に達していたのである。

とくに学生、知識人はその日の生活にも困窮するという状況に対して、党幹部は改革と開放の甘い汁を吸い、ますます特権の行使に走るという状況が一般的であり、学生たちの絶望感は、「中国の将来に未来はない」、「もうこの国は駄目だ」というところまで至っていたのである。

そうしたなかで、さる四月十五日、胡耀邦前総書記が「憤死」のようなかたちで死去した。胡耀邦は二年半前の民主化デモに加担した事で一九八七年一月に総書記の座を追われたのであるが、党中央はこの胡耀邦の死に対して極めて冷淡であった。

たまたまた来日中の李鵬首相は、竹下首相との会談および天皇陛下との会見などの公式日程を終え、関西・九州地方を視察中であつたが、胡耀邦の死に接し、彼の死を完全に過去の人物の死として取り

扱うかのような、冷たい発言をしたのである。

前総書記であり現政治局員という中国の重要人物の死去であるのに、急遽予定を変更して帰国するというようなことも一切しなかった。このことが学生たちを刺激したことはいうまでもなく、学生たちのスローガンのなかには、李鵬の滞日中の言動を糾弾するものも目立っていた。

四月二十二日、胡耀邦の葬儀における趙紫陽総書記の弔辞は、学生たちの期待にもかかわらず、胡耀邦に対して政治的評価をまったく与えず、極めて味気ないものに映った。趙紫陽個人としては、改革派の指導者として胡耀邦を追悼したい気持があつたのかもしれないが、すでに経済改革の破綻によって、党内で力を失いつつあつた趙紫陽にそれだけの勇氣はなかったであろう。しかも彼自身、胡耀邦失墜に際しては、鄧小平とともに胡耀邦を追いつき、みずから胡耀邦の後継者として総書記の地位に就いた



李鵬氏

だけに、胡耀邦に対する評価を与えにくかったのも事実である。

こうした状況のなかで、学生たちの民主化要求は、胡耀邦の死に対する当局の扱いへの不満を契機として、さらに高まっていった。

そもそも学生たちが、なぜ胡耀邦の死を契機に動き出したのかといえば、五・四運動七十周年記念に際する方励之ら急進派知識人の呼び掛けもあったが、より基本的には、さる三月下旬から四月上旬

う苛立ちが、胡耀邦の死を契機に爆発したのであった。

こうして天安門広場は、四月二十七日には十万人規模の学生デモとなったのであるが、学生デモが拡大するもうひとつの大きなきっかけは、十万人デモの前日、二十六日の『人民日報』社説であった。この日、『人民日報』は「旗幟鮮明にして必ずや動乱に反対せよ」と題する強硬な社説を掲げた。これが、今日の中国の最高実力者・鄧小平の意向を体した

ものであったことは歴然としていた。

こうしたなかでデモが盛り上がり、状況が混沌としてきたのだが、四月下旬から五月上旬にかけては、当局側はデモの波に押され、一歩後退するかのような姿勢を示した。すなわち、学生との対話を求める方向へと戦術的な配慮を示したのである。

学生たちは五・四運動七十周年記念を控えて、さらに大規模なデモを計画していた。しかし、五月四日は中国当局にとって重要な政治日程が存在していたのである。その日、アジア開発銀行(ADB)総会が北京で開かれたのである。このアジア開発銀行総会には、建国四十年目にして、台湾の国民党政府から公式の代表が北京を訪れた。それは国共対立の長い歴史のなかでの画期的な日であった。

いまやアジアNIEESの旗手として、台湾は大きな経済的成功を勝ち取り、中国大陸はもとより、アジア諸地域への対外投資をも積極的に行うまでの地位に至っている。政治改革も着実に進展してお

り、北京の学生たちも「台湾の経験を学べ」とか、「蔣経国の晩年に学べ」というようなスローガンを掲げていた。このような話題をもつアジア開発銀行の総会には、アジア各国からの記者が多数取材に来ていただけに、中国当局は何としてでも五月四日のアジア開発銀行総会を混乱のなかで迎えることは避けたかったのである。

ところが、人民大会堂でアジア開発銀行総会が開かれた当日の午後、出席者には天安門広場でのデモの事実がわからないような措置をとったにもかかわらず、続々と学生、市民が集まり、四月二十七日を上回る大規模なデモとなった。

しかもこのデモの中核には、ハンガーストライキを掲げる数百人の学生が存在し、その数はますます増えていくという事態に発展した。中国当局の深刻な懸念は、五月十五日からの中ソ首脳会談の開催であり、各国の記者たちがこの世紀のサミットを迎えるために続々と北京を訪れ、この情勢を目の当りにするのではないかということであった。

事実、何としても混乱を避けたいというのが中国当局の願いであったが、皮肉なことに学生たちは、ゴルバチョフ訪中を「民主化の旗手」の来訪と受け止め、中ソ首脳会談を成功させようとする中国当局の意図を逆手にとって、民主化をさらに盛りあげていったのである。こうした事態のなかで、中ソ首脳会談を迎えざるをえない状況になろうとは、当局の指導者の想像を絶するものであったに違いない。

鄧小平よ、お前は何者なのか

五月十五日、ゴルバチョフ書記長一行は北京を訪れ、楊尚昆国家主席との形式的な会談を終え、翌十六日午前十時四十分から世紀の首脳会談が人民大会堂で開催された。

中国のテレビはその場面を衛星中継で流すという演出をし、たまたまNHK衛星放送の解説を担当していた私は、臨場感あふれる場面を目撃することができた

が、鄧小平・ゴルバチョフ会談は、まさに世紀のサミットにふさわしいものであった。

会談は冒頭から極めて密度の濃いものとなった。「三年前にルーマニアのチャウシェスク大統領に、中ソ和解の三条件を提示したメッセージを託したことを覚えていますね」という鄧小平発言に対し、ゴルバチョフ書記長は「そのために私たちは毎年ひとつずつ障害を克服してきました」と答えて、アフガニスタン撤退からモンゴル撤退に至る三大障害の除去に言及した。この時点で、中ソ関係の正常化が実現され、それは党と党との関係を含む中ソ関係の正常化も含むことが宣言されたのである。

ゴルバチョフを迎えた鄧小平には、万感胸に去来するものがあつたに違いない。なぜなら、鄧小平は過去三十年間、中ソの「論争から対立、対立から抗争、そして中ソ和解へ」という現代史の一章を自ら体験してきた生き証人だからである。そしていま、政治的生涯の最晩年



ペンキで汚された故毛沢東主席の肖像画（天安門）

に、中ソ和解という大きな仕事を完成しようとしていたのであった。

中ソ対立が、他の国際関係と決定的に異なるのは、それが一九五六年のスターリン批判によるイデオロギー論争を契機とし、やがて毛沢東思想の高まりとともにこの論争が非妥協的なものとなっていたことにある。

その後、中ソ論争は五〇年代末には国

益や安全保障をめぐる対立となり、一九五九年の毛沢東・フルシチョフ会談時には、共同コミュニケさえ出せないような状況であった。六〇年代初頭には、戦争と平和、平和と共存、ある

いは革命への移行形態をめぐる熾烈なイデオロギー論争となり、鄧小平もこの論争の当事者として、一九六三年の中ソ会談に臨んだのである。

モスクワでの中ソ会談が決裂して北京空港に帰ってきた鄧小平は、毛沢東、周恩来、劉少奇ら、当時の首脳に凱旋將軍のように迎えられたものの、やがて鄧小平は毛沢東と袂を分ち、文化大革命期に

は失墜していった。

鄧小平の対ソ認識は、ソ連とイデオロギー論争はするが、毛沢東のようにソ連を戦略的な敵とみなし、また社会帝国主義とみなして、ソ連と全面的に対決するというものではなかった。しかるに、毛沢東は、劉少奇、鄧小平を現代修正主義者とみなし、内なる敵を打倒するためにも対ソ関係を熾烈な対立関係に発展させていった。

文化大革命の最高揚期である一九六九年、毛沢東、林彪の唱える「人民戦争勝利万歳」の掛け声のもとで、中ソが軍事衝突にまで至ったのは、そうした背景があった。まさに、中ソ関係は異端と正統との非妥協的な宗教戦争のような様相を呈していた。ここに、他の国際関係と決定的に異なる中ソ対立の性格があった。

その当事者でもあった鄧小平は、やがて文革十年の受難を脱し、自ら内政上の「非毛沢東化」を図るとともに、毛沢東の世界戦略・対外戦略の要であった対ソ

対決路線を修正し、今日の中ソ和解に至ったのである。五月十六日の午前十時四十分から約二時間半、予定をはるかに上回った世紀のサミットは、鄧小平にとつて念願叶った歴史的瞬間であった。

ところが鄧小平に対し、中国の民衆は彼の労をねぎらい、ゴルバチョフとの会談を成功させた彼の功績を讃えるのが当然であるにもかかわらず、まったくそれと正反対の反応を示し、その日のうちに「鄧小平、お前はもう退陣せよ」と迫ったのである。

まさに歴史の逆説、痛烈な皮肉といわざるをえないのだが、ここに今日の鄧小平の位置があるのであり、当面の中国の抱える問題の深刻さがあるのである。世紀のスター・ゴルバチョフでさえ、鄧小平の前では、老師の前の学生のようにみえた。首脳会談における鄧小平の姿はそれほどまでに大きな存在として映ったが、中国の学生や民衆は、その鄧小平をもはや必要としないことを宣言したばかりか、「お前はいったい何者なのだ」と

いい始めたのである。

考えてみると、鄧小平は国家主席（元首）でも、首相でもなければ、総書記、つまり党の書記長でもない。制度的には党中央委員会に直属する党中央軍事委員会という軍の組織の長にすぎないにもかかわらず、首脳会談でも結局は鄧小平がすべてをとりしきったように、今日の中国はまさに鄧小平のワンマン体制である。そしてこの日、「老害」ともいえる彼自身の存在が民主化にとっていかに大きな障害であるかを、「民主化の旗手」ゴルバチョフを迎えた中ソ首脳会談によって中国の民衆は改めて確認させられたのである。

趙紫陽の重大なメッセージ

鄧小平・ゴルバチョフ会談に続き、政府レベルのゴルバチョフ・李鵬会談が行われた。そして夕方からは、党レベルのゴルバチョフ・趙紫陽会談が行われたのである。このころ、すでに街頭には民主

化を求めるデモ隊が続々と詰めかけ、北京はもはや麻痺状況に陥っていた。

このゴルバチョフ書記長との会談の冒頭、趙紫陽は極めて重大な発言をしていた。「一昨年秋の十三期一中全会で鄧小平主席は第一線から引き下がりました。しかしながら、すべての重要事項の決定は鄧小平主席によって行われています。鄧小平氏の指導がまだ必要なのです」と、趙紫陽は語ったのである。そのとき、趙紫陽は顔を上げてゴルバチョフを直視してしゃべったのではなく、テレビ

酒都西条の名酒

品質第一

清酒 白牡丹

ハクボタン

延宝三年創業・二百年の伝統

白牡丹

白牡丹酒造株式会社

（飲むは20歳を過ぎてから）

広島・西条



趙紫陽氏

のカメラをみつめてでもなく、伏し目がちにしゃべっていたことが極めて印象的だった。

その瞬間私は、「ここに中国の政治の大きな問題がある。趙紫陽氏さえ鄧小平氏をここまで讃えるところが問題です」と解説を加えたが、私の心のなかでは、これは重大なメッセージではないかと思った。なぜなら、趙紫陽は中国共産党を代表する立場であるにもかかわらず、逆

に彼は党中央で完全に追い詰められていたのである。党内で孤立し、しかもすべてが鄧小平の意向のもとで動いている党の現状を、広場の学生たちや市民にテレビの画面を通じて伝えようとしていたのだといえよう。

その翌日の夜、趙紫陽と李鵬の両首脳は学生を見舞ったが、すでに身辺危うくなりつつあった趙紫陽は、学生たちとの対話で一瞬、涙にむせびかいていた。一方の李鵬は、再び「動乱」という言葉を用いて学生を糾弾し、対話は決裂した。こうして、中ソ首脳会談が実質的に終わったその瞬間から、北京の情勢は極めて劇的な展開を遂げつつあった。十七日朝、ゴルバチョフは天安門広場の人民英

雄記念碑に献花する予定になっていたが、広場に一步も足を踏み入れることができず、さらに、午後には予定していた中国のシンボル・故宮博物院の見学さえできなかったのである。

ゴルバチョフ書記長は訪中に先立ち、偉大な中国文明に少しでも接してみたい、中国の文化を尊敬していると語った。にもかかわらず、ゴルバチョフ歓迎の「人民の波」のゆえに、中国文明の象徴である故宮博物院に足を踏み入れることもできず、十八日北京を去ったのである。

十九日、午後十一時近くに北京に戒厳措置がとられたというAP電が入ってきた。さらに未明にかけて緊急の党中央会議が開かれ、保守派長老や李鵬ら原則派の指導者が、改革派の趙紫陽を追い詰める、「趙紫陽解任」の報が世界に流れたのである。

翌二十日、午前十時を期して戒厳令が施行され、建国以来初めて北京が戒厳体制下に置かれた。ゴルバチョフ訪中が終

るやいなや、こうした事態に至ったのであり、まさに北京では、中ソ首脳会談と民主化闘争という二つの大きなドラマが、一つの舞台上演じられていたのである。

「戒厳令」で墓穴を掘った李鵬

今回の一連の学生デモは、極めて整然とした、ハンガーストライキを中心とした一種の請願デモであり、学生たちはなにも暴力的な破壊活動を行なったわけではない。たしかにゴルバチョフ書記長の日程が学生デモによって変更を余儀なくされたとはいえ、社会的破壊活動をしたわけではなかった。後に「平和的請願」と中国のマスメディアが伝え始めたのは、当然のことである。

にもかかわらず、政府当局はなぜ戒厳令の施行という強硬措置に出たのか。もとより、学生たちによる民主化の波が広範な市民層に支持されて、全国津々浦々へと拡がりつつあったということも、大

きな背景にあった。しかし、それをより決定的にしたのは、中ソ首脳会談が終了した十九日から二十日にかけての中国の体制側内部での思わぬ事態の展開にあった。

十九日深夜から二十日にかけて、まず首都を警備する第三十八軍が民主化デモに呼应し始めたという衝撃的な情報が伝えられた。第三十八軍というのは、毛沢東時代よりその存在が一部には知られていたが、首都警備の衛戍部隊とともに、ゴルバチョフ訪中の安全を確保するために警備に当たっていた精鋭部隊である。彼らは全力を尽してゴルバチョフの安全を確保した反面、学生たちのデモを取り締まることには極めて消極的だったのみならず、こうしたなかで副軍長が自殺し、軍長は辭任するなどして、兵士のなかには民主化闘争への共感を示す者たちが多数出てきていた。そこで急遽第三十八軍に替えて、地方の軍隊を導入したのだが、人民解放軍のなかでも、まず総後勤部が民主化デモに呼应し始めた。次に、党中

央軍事委員会の内部にさえ民主化デモに呼应する状況が始めていたという。そして、首相である李鵬の意向を離れて、國務院の各省のなかにも民主化デモに同調する動きが出てきていた。

つまり、一時は李鵬ら体制側が追い詰められていたのであり、それが戒厳令を決定した大きな理由だったといえよう。しかし、そのことがやがていつの日か、戒厳令を施行した当事者の墓穴を掘ることになりはしないだろうか。

二十日の戒厳令布告に際し、李鵬首相

岐阜の柿から生れて230年

美半柿



株式会社

柿谷

本店/大垣市依町39
柳ヶ瀬店/岐阜市柳ヶ瀬通4丁目

は強硬なステートメントを発表したが、そこには二つの重大な誤りがあった。これはすなわち、この運動を「動乱」と決めた鄧小平の重大な誤算ではないのか。

まず第一は、今回の学生デモは一握りの破壊分子の企みによるものであり、多くの愛国的な学生は彼らに騙されているかのごとき発言である。今日の事態はそうした一握りのグループが画策したものでもなければ、党内の路線闘争と結託したある特定の組織者が学生たちを煽動したものでないところに大きな特徴がある。まさに一種の市民革命としての色彩をもった、中国再革命を求める広範な大衆的基盤があることを、鄧小平や李鵬はまったく読み取っていない。

趙紫陽が学生に同調し始めたのも、党内で追いつめられた趙紫陽が自らの立場を打開するために学生たちに近づいたものであり、むしろ趙紫陽が学生たちのデモを政治的復讐に利用しようとしたとさえいえる。学生たちは決して、趙紫陽を救

済するためにデモを行なったのではない。

第二の重大な誤りは、李鵬は「私は党と政府を代表して戒厳令を施行した」といい、趙紫陽を解任したことを言外に認めているのだが、これは極めて非合法的なものであり、違法だといわざるをえない。

つまり、今回の民主化要求で学生たちが叫んでいるのは、憲法に基づいて政治をしてほしい、つまり「人治」ではなくて「法治」を、ということである。学生たちは、鄧小平の存在はいったい何なのか、最高実力者かもしれないが憲法上は何の権限もない、政府の代表でもないければ、党の代表でもないではないか、と糾弾しているのだ。

同じように党規約に照らせば、趙紫陽失脚といっても、党の総書記を解任するのだから、中央委員会総会を開いて議決をしないかぎり、政治局拡大会議といった一部の上層部だけの意向で解任できるはずはないのである。

したがって、戒厳令の施行は一種の「子防クーデター」だといえよう。追いつめられた鄧小平―李鵬体制が自分たちの権力を守るために戒厳令を發布したのだといわざるをえない。

ところが、その後二十一日に人民解放軍が『北京市民に告げる書』を發布したが、この声明は明らかに人民解放軍自身の戸惑いを示していた。このような状況では、戒厳令を施行しても軍隊は動くはずがない。そして、翌二十二日早朝五時に予定されていた人民解放軍による強行突破、すなわち天安門広場からの学生の強制退去も実現しなかったのである。

そしてついに、党中央軍事委員会主席である鄧小平が、再び民主化要求を「動乱」と決めつけ、李鵬が党と政府を代表して、この「動乱」を鎮圧するといいな

がらそれでもできなかった、つまり軍隊が動かないというジレンマに陥ったのである。

にせよ、軍内部からも批判が続出したということは、独裁者の末路を示す以外のなにものでもないというのが、歴史の一般的な見取り図ではないのか。

趙紫陽さえも救いの星ではない

五月二十三日から二十四日にかけて、事態は再び流動化し、一度解任されたと噂された趙紫陽が、カナダ、アメリカを訪問中の万里・全国人民代表大会常務委員長の帰国を待って、事態の打開を図るとともに、状況を逆転するかもしれないという動きが出てきた。

しかも人民解放軍のなかにも、お膝元の北京軍区はもとより、瀋陽軍区、蘭州軍区など、有力軍区の部隊は北京に出動することを拒否した。また湖北省、山西省などから理由も知らされずに送られてきた人民解放軍の兵士も、北京市近郊や北京駅に到着するなり「人民の波」に押しとどめられ、彼らの必死の説得によつて動揺し、次々に脱落していくという状

況がみられた。ここに至って状況が再び転回するという、もうひとつのドラマが幕開けしたのだ。

しかし、五月二十五日に至って、再び状況は逆転し、李鵬首相らの強硬派が強権をちらつかせて優位に立ち始めた。万里はアメリカから北京へ戻れず、上海で足止めされて説得され、学生や市民の期待を裏切り、戒厳令布告の法的根拠を裏づけるべき全国人民代表大会常務委員会の開催もせずに、戒厳令に賛同するという憲法違反を犯してまで強硬派に加担することとなった。

「護憲」という学生たちの切実な呼び掛けも、またもや水泡に帰したのである。

だが一方、仮に今後、趙紫陽が復権し、改革派とともに中国の指導権を確立する可能性が出てきたとしても、それは決して容易なことではない。すなわち、そのことは李鵬の退陣と鄧小平の失墜を意味するからである。

仮にそのようなことがあれば、民主化闘争の勝利には違いないが、問題はそ

趙紫陽首相さえも学生たちの民主化要求にとつての救いの星ではない、ということに事柄の本質があるのだ。現に趙紫陽でさえも、胡耀邦失墜に加担したではないか、彼は窮地に陥ったがゆえに、学生に加担しようとしているのではないかということを、学生たちはすでに見抜いているのである。

つまり今回の一連のデモは、もう社会主義はごめんだ、共産党のつくった体制はこんなものか、というまさに中華人民共和国の建国の理念そのものを問い直す大きな「中国再革命」であることを見逃すわけにはいかない。しかも、広範な知識人に支持されたこの運動は、単なる民主化闘争ではなく、まさに一九一九年の五・四運動に匹敵する、「知識革命」としての様相を帯びている点も忘れてはならない。

今日の中国の学生や知識人の政治改革への意識は極めて先鋭であり、それはもう切羽詰った絶望感に裏打ちされているものだけに、ここで敗北してはならない

という切実な使命感に裏づけられている。それゆえに、跳ね上がった行動を慎むという自制が効いていたのだろう。もしも、一部の勢力が党内路線闘争と結託して、デモを行おうとしていたのであるならば、これほどの拡がりはなかったであろうし、そのような姑息な民主化闘争であれば、化けの皮はすぐに剥がれたであらう。

ある意味では、広範な中国の民衆が先進的な知識層に呼び覚まされ、大きな社会変革の輪をつくっていったことの歴史の意義は、たとえ今回の運動が敗北したとしても、決して忘れることはできない。将来の中国の行く末は自ずと明らかであり、共産党の一元独裁体制がいつかは覆つていかざるをえない、その新しい革命の幕開けだということができよう。

ゴルバチョフの教訓

それにしてもゴルバチョフ書記長は、大変なお土産を北京に残して帰っていつ

た。中国側は『人民日報』が中ソ首脳会談の歴史的意義を讃え、ソ連側も『プラウダ』がその成功を讃えている。しかし、ゴルバチョフはまさにベレストロイカ歓迎の波によって、天安門広場にも足を踏み入れられなかったという衝撃的な体験を、どのように受け止めているのだろうか。

彼はたしかに、政治改革においては、強力なリーダーシップのもとに次々と大きな成果を上げていく。とくにこの五月には先の人民代表選挙に基づく人民代議員大会の改編で、ゴルバチョフ政治改革の仕上げをやらうとしている。

ソ連はハードな社会主義であり、硬構造の社会主義国だから、中国のようなソフトな社会主義、柔構造の社会主義とは違い、指導者が呼びかけても、社会全体はなかなか変革しにくい。

政治改革に関しては、新しい人民代議員大会の組織にもまだ非民主的な要素が残っており、モスクワ選出の急進改革派エリツィン前政治局員らの立場からは程

ソ連を長期にわたって悩ますであろうことも事実である。

社会主義は民族問題をもっとうまく解決するといわれながら、結局、それが解決できない。また、社会主義は経済的な豊かさや平等を実現するといっているが、経済が著しく立ち後れてしまった。

もとより、こうした社会主義の苦悩が今日の中ソ和解をもたらしたし、もはや内輪喧嘩をやっている余裕がないことを自覚させたのである。社会主義国が活性化するためには、中ソの相互依存・相互補完関係がさしせまって必要だったのである。

ともあれ、今回、中国の学生たちが掲げた民主化のスローガンが、共産党の一元支配を強行してきた中国当局を大変な窮地に陥れる大きな起爆剤となったことは否定できない。もし、ゴルバチョフ訪中なかりせば、デモはここまで拡大しなかったともいえる。

こうした皮肉な結果を、大きな土産として中国に残したゴルバチョフのジレン

遠いものがある。
しかも、経済改革が遅々として進まず、ベレストロイカの前途には、極めて大きな困難が横たわっている。

しかし、少なくとも政治改革においては、従来に比して大きな成果を上げた。一方、ゴルバチョフの「新思考外交」は、米ソ関係や中ソ関係の改善、またヨーロッパを中心とする対西側外交の成果にみられるように、単なる平和攻勢だという揶揄を押し止めるほど、具体的な内容をもって着々と実行されてきただけに、ゴルバチョフの手腕を私は高く評価するものである。

問題は経済改革であり、ゴルバチョフ書記長といえども経済において硬直したソ連のシステムを打破し、経済を活性化することに成功しているとはいえない。経済の活性化には極めて多くの障害があり、今後も長い苦難の道が続くことが予測される。

今回、ゴルバチョフは中国を訪問し、経済改革の伴わない政治改革の行きすぎ

マも驚きも、極めて深刻なものがあるだろう。

二十世紀は「戦争と革命の世紀」といわれるが、戦争と革命で大きくなったアメリカもソ連も、バックス・アメリカーナの崩壊、バックス・ソビエチカの解体という言葉が聞かれるように、昔日の面影を失いつつある。

一方、アジアでは革命を経ずして、革命国家よりもはるかに大きな成果が得られている。台湾、韓国を始めとするNIES諸国やASEANが経済的に台頭してきているいま、アジアにはもう社会主義革命は起らないであらう。なぜなら、革命を通過しない社会が、豊かな経済的達成を遂げているからである。

こうした世界情勢のなかで、いよいよ社会主義解体の予兆が、まさに今回の中国のドラマによって示されている。今日の中国の激動は、こうした広い歴史的パースペクティブのなかで位置づけてみる必要があるのではないだろうか。

(写真提供・共同通信)

が、いかに危険なものであるかということとを学んだ反面、いかに政治改革が成功しても、経済改革が成功しないかぎり、民衆が離反していくであろうことを、今後の教訓として学んだはずである。

同時にゴルバチョフ・ソ連は中国の学生デモにも匹敵する、もう一つの大きな脆弱性を抱えている。それは中国以上に深刻な民族問題であり、昨年のアルメニア、アゼルバイジャンの紛争から、さらに最近ではソ連邦から離反傾向にあるバルト三国、そしてスターリンの故郷であり、シェワルナゼ外相の故郷であるグルジアにまで民族反乱が拡がり、ウクライナにも飛び火しつつある。一連の民族反乱によって、ソ連は多数の死傷者を出し、重大な危機を味わったばかりであるが、この民族反乱の芽は、一向に摘まれている。

今後、国内のベレストロイカやグラスノスチが進めば進むほど、すなわちシステムが緩やかになればなるほど、こうした問題が内発的、多発的な紛争として、

21世紀の新しい日本を創る提言誌

昭和53年2月10日第三郵便物認可
平成元年7月1日発行(毎月1回1日発行) 通巻139号

Voice

ボイス

激動する世界と日本 | 長谷川慶太郎 |

—— 円安・中国・ソ連 ——

もっと豊かに もっと幸福に | 日下公人 |

7

